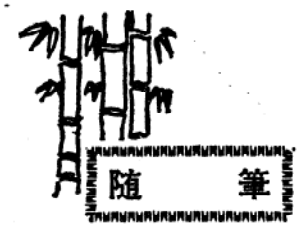

クリルタイのことなど

山　田　信　夫*

クリルタイと聞いてすぐ，その意味のわかる人はどれだけ居るだろうか．そんなには居ないと思う．しかし，なかには世界帝国をきずきあげた，あのモンゴルのチンギスカーンという英雄が，カーンの位につくときクリルタイとかで選ばれた，という話を聞いたか読んだかしたことがあるという方は居られるかも知れぬ．そのとおりであって，古代のモンゴル民族が，国家の大事を議し決するとき，族長たちを集めて開かれた会議，いわば国会のようなものをクリルタイとよんでいた．この言葉は，実は現代モンゴル語でもクラル，クラルタなどと，若干変化しながらも meeting, gathering, congress, conference などの意味で使われている．4年に1回開かれる国際モンゴル学者会議というのがあり，その第3回が，昨年モンゴル人民共和国のウランバートルであった．私も参加したけれど，その会議を現地ではまさにクラルとよんで居た．それだけでなく，この言葉は，モンゴルと同じく，古くは草原騎馬の民であったトルコ民族も使っていて，現代トルコ語でも，むかしとほとんど同じクルルタイというのが，やはり「集り・会議」を意味している．

毎年7月中旬，長野県野尻湖畔のホテルを会場として，3泊4日あるいは4泊5日のスケジュールで開く集いを，私たちが野尻湖クリルタイとよんでいるのは，このモンゴル語・トルコ語に共通している，歴史的にも古い，由緒ある表現を借りたものだった．この集りは，いつの間にか今年でもう14回目になったが，もともと，北アジア・中央アジアを中心に，ユーラシア大陸にひろく拡がっているトルコ系・モンゴル系その他の民族の，歴史・言語・社会，あるいはその地域の地理・経済から国際関係など，とにかく関係あるものはなんでも共通の話題にしようという，この頃ではすっかりはやりとなっている夏期ゼミのたぐいである．したがって，参加者は，歴史学・民族学・言語学からはじまって，自然科学でも社会科学でも，どのような分野の人であろうと，とにかくこれらの民族，この方面に関心を持つ人なら誰でもよい，野尻湖畔に来ることに関心を持つだけでも結構，来たる者は拒まず式で，いままでやって来ている．

野尻湖クリルタイ，ときにはただクリルタイとよぶことも，正式にどこできめたというものではなかったが，いまや定着してしまった感はある．はじめて集りを持ったとき，言い出しっぺの私は，一応「若手アルタイ学・中央アジア研究者集会」と名のってみたが，このよび名は，その後もなにか，とくに恰好をつけねばならぬようなときにだけ使うけれど，新しい参加者のほとんどは，それも知らないと思う．ただし「若手」という表現は，発足後2～3年もすると，助手クラス大学院クラスの諸君が，彼らからみると先生クラスの者が「若手」などとはおこがましいと，「純若手」と称する集りを持ちはじめたので，そのときから「若手」の名は彼らにゆずることにした．

ついでだが，毎年なん人かは出張依頼状を必要とする人があって，その依頼状をつくるときには「……集会」でもぐあいが悪いということで，このときだけは，ものものしく「日本アルタイ学会」という名を使うことにしている．そうとなれば角印ぐらい押しておかないと恰好がつかぬわけで，どこかに捨てられている，磨滅して文字がよく読めなくなっているのを探し出し，判読できぬようにソーッと押すという芸当もすることになる．毎年これには苦労するので，ひとつ正真正銘のを作っておこうと思いな

*山田信夫（Nobuo YAMADA），大阪大学，文学部史学科，教授，北・中央アジア史

がら，まだ実現していない．とにかく，日本ではやはり「学会」と名のらなければ出張させて貰いにくいというのは，どんなものだろうか．だから，やたら学会をつくり，会長と名のりたがる人があとを絶たぬのだろう．野尻湖クリルタイは，学会ではない以上，その会長などもちろん居ない．もし置くならそれは，大カーンという名でよばねばならぬ，というものである．

ところで，さきの純若手の諸君の多くは，もちろん7月のクリルタイに参加するけれど，それ以外に，東京と関西との2カ所で，月例の研究会もするほど着実な歩みを進め，この方はそれぞれに「アジア文化研究会」「若手ユーラシア研究会」と名のる組織をつくり，会費も集めるし名簿も発行するというまでになっている．しかし，御本尊のクリルタイの方は，いつまでも年に1度の集りだけで，当初からの「学会」化はしないという方針を堅持し，発足当時のよびかけ人が，世話人として毎回お世話をするだけ．参加方法も，遅れてこようが，早くひきあげようが，予定さえ知らせてもらい，帰るとき宿泊代をちゃんとはらってもらえばかまいません，という方式でやっているのだから，世話する方は，手間がかかるといえばかかる．しかし，ホテルの方もそうだし，われわれも馴れてしまって，部屋割りでも，定連ともなれば，大いびきをかくくせのある人，碁打ちを楽しみにしている人などわかっているし，費用の徴集でも手順が自然にきまって，世話人は一般参加者より数時間早く現地入りをして準備するだけで，無事すんでいるのだから，世の中，あまりキチンとやらぬ方が得というものかも知れぬ．といっても，世話人ももう60才近くなり，お金の計算など，とみに下手になってきたので，この頃は若い人たち数人に実務は手伝ってもらって，バトンタッチの時機をねらっている昨今ではある．

こんな集りではあるけれど，その内容はけっこう充実していると言ってよい．いくらなんでも，そうでなければ話にならぬわけで，ふつう，教授クラス，ときには定連外でもしかるべき方にとくにお願いして，一種の特別講演をひとつする．そのほかに，若手の人数名の研究発表もしくはシンポジウム．それに毎年5～6名は居る，在外研究・海外調査あるいは外国留学からの帰朝者や，国際会議出席者の報告，海外学界事情の紹介などの各 session がある．そして，これはこの集りの看板のひとつとされているが，コンフェッションとよんでいる session を開会冒頭に置いてあって，そこでは全員が，この1年間のわが行状を confess することにしている．行状といっても私生活のそれではなく，もちろん研究生活に関することだが，とにかく，成果があればもちろん，失敗なら失敗で，恥も外聞も捨てて告白するというわけで，研究発表の session で機会を与えられなくても，けっこうこのとき研究発表ぶんぐらい長広舌をふるう人が出たり，反論をぶちはじめる人が出たりで，多くのばあい司会を担当する私も，このときはいささか気を使う．これはまる1日はふつうかかる．なかには，これを免がれようと，わざと遅れて参加する作戦をたてた人も居たが，それは，2日目でも3日目でも，姿をあらわしたとき，ほかの session の前に必ずやらされ，のがれることはできない．

こんなことでこれまでやって来て，いまや，定連の長老として70才を越える方から60才台，いわば世話人の先生クラスから，若い方では学部学生まで，女性も多いときには10名前後，北は北海道から南は九州——いままで沖縄からの参加はなかった——まで，全国からの参加者が，はじめは20名前後から出発したのが，昨今60名を越すのがふつうになった．今年は，全国36の大学その他に籍を置く者が計72名参加した．外国人も毎年なん人かは参加しており，今年も3名居た．世話人たちも，そろそろ面倒臭くなり，最近ホテルが改築するらしいと聞いて，その機会にめでたく解散ということにしようかと話しあっていたら，改築の話もまだ実現せず，それよりも是非続けろという声が強く，やめるにやめられぬ状況というのは，考えてみると，発起人世話方としては冥利につきるというものかも知れない．

それにしても，たしかに，この集りを通じてふだん接触する機会のない他大学や他分野の先生と，ゆっくり話ができたりするし，同年輩の

者がすっかり親しくなって，分野・テーマを共通にする者なら，その後の研究で，情報はもちろん交換するし，協力するようになるしするで，若い世代の人たちにとって，ふつうの学会など，ほかでは得られない効用を与えていることは事実である．開かれた大学，大学間の相互交流，それに学際的研究などというのを地でいっているようなことになって，これだけは，いささかなりとも日本学界に寄与することになろうかと，自讃したくもなるというのが，われわれのいつわらざる気持ちである．

ところで，さきに，われわれのクリルタイを，必要あってもっともらしくよぶときに，アルタイ学という名を使うことにふれた．このアルタイ学 Altaic studies というのを少し説明しておこう．アルタイ学とは，アルタイ諸語とよばれている言語を使う諸民族の，言語はもちろん，歴史，文化などを研究する諸分野を綜合する名称で，その諸民族は大きく，トルコ系，モンゴル系，満州ツングース系にわけられている．朝鮮民族をその系統にくみ入れる人も居るが，まだ証明し切れていない．なお日本民族もそれと少からぬつながりがあることは疑ない．このアルタイとは，アルタイ山脈のアルタイで，いまは正しくないとされているが，かって，これらの民族の原郷はアルタイ山脈地方だったという説があって，つけられた名だった．そういう意味だから，クリルタイに集まる者は，もともとなんらかの意味でアルタイ学に関連するというので，あのような名称を使ったわけである．余談になるが，先年，阪大の本部に所用があって行ったとき，事務局の玄関前に大きな立看板があって，「近畿地区アルタイ研究集会」と書いてあるのが目についた．この大阪で，私の知らぬアルタイ学の集りなどあるわけはないのにと，おどろき訊ねてみると，このアルタイとは「アルバイト対策」の略で，学生部職員の研究集会であることがわかって大笑いしたことがあった．

それにしても日本では，アルタイ学の名は言語学畑ではよく使うが，歴史学などの分野では，北アジア・中央アジアあるいは内陸アジアなど，地域を中心にするのがふつうだった．というより，いまでもそうである．私は大学の史学科を出て，いまも史学科で東洋史学講座を担当としているが，東洋史学というものはもう実体がない．むかしの東洋史＝中国史とその周辺史の時代ならともかく，それは明治時代のことであって，現代日本人の目は，東南アジアはもちろん，中近東，アラブ・イスラム世界に大きく開かれている．それを大学では東洋史学講座——学科ではない——で担当させようというのだから無理もよいところだろう．しかも国立7大学で博士課程まで置かれている阪大で，東洋史学講座は1講座だけ．現代日本の文教政策として，これからの日本，日本人のためにも，こんな実情を見のがしておいてよいのかと，わめきたくなるのは，私だけではないと思う．

話がそれかかったが，私は外国ではふつうアルタイ学，ときにトルコ学 Turcology の専攻ということで通っている．トルコ学者とよばれるのは，これまでトルコ民族史に関する研究を発表することが多かったからだし，近年まとめつつあるのが，トルコ系民族のひとつウイグル民族の中世古文書の研究で，それが外国でもよく知られているためだが，本当はトルコ民族だけではない．一方，日本のなかでは，専攻を言うとき，東洋史というのはいま言ったように無意味だから，ふつう北・中央アジア史ということにしている．しかし実はこれも不合理な点があって，この頃は中央ユーラシア史という言い方も使いはじめている．ユーラシア大陸の中央部を大きく占める，東は興安嶺から西はヨーロッパのカルパート山脈の間に展開する，草原とオアシスの世界を対象とするという意味である．中央ユーラシアの話をする余裕がなくなって残念だが，世界の歴史を研究するものの間では，いまや既製の19世紀的縄ばりではどうにもならなくなっていることは事実である．クリルタイの，思わぬ盛況ぶりもこのことの反映にちがいないと思う．　（昭和52.11.22稿）